

# クチャ地方の中国様式絵画

中野照男

はじめに

- 一、キジル石窟、クムトラ石窟の概要
- 二、クチャ地方の絵画の様式分類
- 三、両様式に共通する画題
- 四、中国様式絵画の特徴および年代  
むすび

はじめに

クチャ地方とは、中国の新疆ウイグル自治区庫車県の近辺を指す。新疆ウイグル自治区の中央には、タクラマカンという名の大きな砂漠があり、北を天山山脈、南を崑崙山脈に挟まれているが、この砂漠の北辺、天山山脈の南麓を、かつてのシルクロードの一つのルートが通っており、このルートのほぼ中央にクチャは位置する。このクチャの周辺には、石窟寺院址が沢山あり、その中でもっとも規模の大きなものがキジル石窟である。それに次ぐ規模をもつのがクムトラ石窟であり、その他にもクズルガハ石窟、シムシム石窟などがある。

本稿で、主として取り上げるのは、キジル石窟とクムトラ石窟である。何故ならば、キジル石窟には、このクチャ地方に特有な様式で描かれた壁画が

クチャ地方の中国様式絵画

多く残り、クムトラ石窟には、中国様式の絵画が沢山見出されるからである。今世紀の初め頃にこの地域を考古学的に調査したドイツの探検隊が報告して以来、一般に、この地域の絵画は大きく三つの様式に分類される。詳しくは後述するが、最初の第一、第二の様式はこの地域に独自の様式であり、第三の様式が、本稿で問題にする中国様式の絵画である。これまで、第三の様式については、次のように言われてきた。第三の様式は、第一、第二の様式とは断絶がある、何故ならば、石窟の造営、壁画の制作に携わってきた民族が変わったからである、すなわち、それまで石窟の造営に携わっていたクチャ系の民族に代わって、この地域に進出してきた漢民族が新たに石窟の造営や寺院の運営を行ったため、それまでの小乗教系の絵画に変わって、経変を中心とする大乘教系の画題が採用され、様式も中国風になったのである。基本的には、その考え方に間違いはないであろう。しかし、一つの地域の絵画様式が、石窟造営に携わった民族の交替によって、それほど劇的に変わるものであろうか。実際には、もう少し緩やかな変化ではなかったか。本稿では、クチャ地域の独自の様式の絵画と、クムトラ石窟に多く見られるこの中国様式の絵画を比較検討することによって、様式の変化の実態をもう少し細かく分析してみたい。

## 一、キジル石窟、クムトラ石窟の概要

キジル石窟は、庫車県からやや西北に六七kmほど行ったところであり、ムザルト河の北岸の崖に二三六の石窟が掘られている。石窟の分布は、地形に従って、大きく四つの区域に分かれ、現在中国研究者はそれらを西から、谷西区、谷内区、谷東区、後山区と呼び、後山区を更に南区と北区に分けている。ちなみに、ドイツ隊は、谷西区、谷内区、谷東区を併せて第一区、谷内区を形作る谷を大峽谷または第一峽谷、後山南区を第二区、後山北区を第三区と呼んでいる。各区域に存在する石窟数は、谷西区八一窟、谷内区五五窟、谷東区七〇窟、後山南区二〇窟、後山北区一〇窟である。<sup>(1)</sup>

クムトラ石窟は、庫車県の西方約二〇kmほどのところであり、やはりムザルト河の東岸の崖に掘られ、現在中国研究者によって、一一二窟が番号されている。石窟は四つの区域に分かれている。岸の一番南側、谷の入口付近に四つの小さな谷（溝）があり、これらの溝の周辺にある三二窟を谷口区の石窟と呼んでいる。窟番号の前に「谷口」の略号であるGKを被せて表記し、他の区域の石窟と区別する。ドイツ隊の呼ぶ第一峽谷、第二峽谷は、この谷口区の第一溝、第二溝に当たる。つづいて、南に向かって流れるムザルト河をさかのぼると、大きな谷（大溝）があり、この谷の南側を谷南区、谷の内側を谷内区、谷の北側を谷北区と呼び、これら三区を総称して窟群区とも呼んでいる。ドイツ隊はこれら三区を併せて、主群と呼び、大溝を記録谷と名付けている。石窟数は谷南区四一窟、谷内区一八窟、谷北区二一窟で、併せて八〇窟となる。<sup>(2)</sup>

## 二、クチャ地方の絵画の様式分類

クチャ地域をもっとも早く調査したのは、一九〇三年四月の第一次ドイツ隊のグリュンヴェーデルである。この折の調査の対象はクムトラ石窟であったが、その詳細は明らかではなく、グリュンヴェーデルやル・コックの断片的な記述から、GK第二三窟（ドイツ番号、第二峽谷第一穹窿窟）の穹窿内面壁画<sup>(3)</sup>、第三八窟（主群第三三窟、涅槃窟）の後廊中心柱壁の涅槃図を切り取ったこと<sup>(4)</sup>、第一六窟（主群第一四窟、キンナリ窟）の調査をしたらしいことなどが知られるのみである。<sup>(5)</sup> 同年四月から八月にかけて、第一回大谷探検隊の渡辺哲信<sup>(6)</sup>、堀賢雄<sup>(7)</sup>が調査を行った。続いて一九〇六年一月から五月にかけて、グリュンヴェーデルを隊長とする第三次ドイツ隊がこの地域のかなり詳細な調査を実施し、この折にドイツ隊はキジル石窟とクムトラ石窟の番号を<sup>(8)</sup>行い、詳細な報告書を作成した。同年にはベレゾフスキー兄弟もこの地を訪れ<sup>(9)</sup>、その後、一九〇七年四月から六月にかけてペリオ<sup>(10)</sup>、一九〇八年にスタイン<sup>(11)</sup>、一九〇九年三月から四月にかけて第二回大谷探検隊の野村栄三郎<sup>(12)</sup>、一九一〇年一月にオルデンブルグ<sup>(13)</sup>、一九一三年三月から四月にかけて第三回大谷探検隊の吉川小一郎が調査を行った。<sup>(14)</sup> 一九一三年六月から十月にかけて、第四次ドイツ隊のル・コックが調査を実施しているが、ル・コックは一九〇六年に続き、二度目の調査であった。一九二八年九月に西北科学調査団の一員である黄文弼による調査が行われ<sup>(16)</sup>、戦後は、韓樂然<sup>(17)</sup>、常書鴻<sup>(18)</sup>、閻文儒<sup>(19)</sup>による調査の後、一九七九年から一九八一年にかけて、北京大学歴史系考古実習班と拝城県キジル千仏洞文物保管所による本格的な調査が行われた。<sup>(20)</sup>

戦前、この地域を重点的に調査したのはドイツ隊であり、彼らは、当然この地域の石窟や石窟壁画の様式分類について積極的に発言している。しか

し、グリウンヴェーデル<sup>(21)</sup>、ル・コック<sup>(22)</sup>、およびル・コックの研究を補佐し、継承したヴァルトシュミットの<sup>(23)</sup>の考え方はよく似ているとはいえず、やはり微妙に違っている。現在、ベルリン国立インド美術館の見解は、ヴァルトシュミットの説を踏襲しており、<sup>(24)</sup>一般にもその見解は認められているといえよう。その見解によれば、第一様式は、第一期インド・イラン様式と呼ばれる。ガンダーラ美術の影響を濃く受けた様式で、人物の肉体系現も自然で、さほど誇張が見られず、彩色も緑色を除いて、穏やかな暖色系の色を使っている。年代は五〇〇年頃とみられている。第二様式は、第二期インド・イラン様式と呼ばれ、第一様式がこの地域で独自に展開し、成立した様式と考えられているが、イランの美術とも、インドの美術とも関連をもっている。顔や肉身はやや観念的に表現され、とりわけ顔は目鼻が顔の中央に引き寄せられた独特のものになっている。またラピスラズリの青を主体に、全体に寒色系の色を多用し、強い隈取りを施すなど、彩色技法にもこの地域独特のものがみられる。年代は六〇〇年頃から六五〇年頃と考えられる。中国仏教様式と呼ばれる第三様式は、名前の通り中国的な様式で、クチャ地方ではキジル石窟には見られず、クムトラ石窟に多い。年代は八、九世紀と考えられている。

このドイツ隊の様式分類は、壁画の様式的な特徴、好んで描かれる主題、表現形式、石窟形態などを基にして考えられたものであるが、やや概念化しすぎた感じは否めない。また、年代の推定も、伴出した文書の書体の年代から判断したとはいえず、やはり相対的なもので、十分な根拠は与えられていない。これに対し、北京大学の宿白氏は、近年の詳細な調査の実績に基づき、一九八三年に刊行された『中国石窟 キジル石窟一』において、石窟の形式分類とその年代に関する新しい見解を出した。宿白氏は、石窟の形式、石窟と組み合わせられた壁画や塑像の内容の二点から区分を行い、石窟形式を三つの段階に分けた。各段階の年代を決定するに際しては、壁土に混ぜられた珐を標本として、放射性炭素年代測定法を利用した。宿白氏は測定値に基づき、第一段階と第二段階がキジル石窟の盛時で、なかでも四世紀後期から五世紀の間がその最盛期である、第三段階は次第に衰微に向かう時期であるが、クムトラ石窟の盛唐、中唐の様式の壁画とはまだ時期的に隔たりがある、とした<sup>(25)</sup>。その結果、キジル石窟において盛んに石窟が造営された時期を、ドイツ隊の見解よりも引き上げることとなった。しかし、宿泊氏の見解は、石窟の形式区分とその年代であって、決して壁画の様式区分ではないため、ドイツ側の編年と宿白氏の編年を同じ土俵で論ずることは目下のところできない。

同じく北京大学の晁華山氏は、クムトラ石窟を論ずるにあたり、石窟の形式、画題、画風に見られる民族の系統を分析して、龜茲系石窟と漢系石窟とに分け、その年代を龜茲系は五世紀から八世紀中葉まで、漢系は七世紀下半期から八世紀にかけて造営されたと考えた。ただし、クムトラ石窟の開鑿開始の時期は、キジル石窟のそれに遅れ、龜茲系石窟の最終時期は、キジル石窟のそれと同じか、あるいはやや遅れるとする<sup>(26)</sup>。晁華山氏の見解も、石窟の形式分類に基づいたものであり、年代の推定も宿白氏の説を踏まえたものであるが、壁画の画題、画風に表われた民族的な系統を問題とする点に、様式的な発想がうかがわれ、龜茲系の石窟をより細かく分類しさえすれば、ドイツ側の見解と十分に比較研究することが可能となるであろう。

以上、クチャ地方の絵画の様式とその年代に関する諸説を概観した。クチャ地方の絵画の様式分類と年代推定は、未だに解決を見ない問題ではあるが、なかでも未解決であるのは、この地域に特有な様式をもった絵画の分類と年代の問題である。では、いわゆる第三様式について、三者の見解に相違

挿図1 キジル石窟第205窟 窟頂側壁 因縁図

はあるのだろうか。ドイツ側の見解に見られる、第一、第二様式に対する第三様式、宿白氏の見解に見られる、キジル石窟の第三段階とも時期的に隔たりのあるクムトラ石窟の盛唐や中唐様式の壁画、晁華山氏の見解に見られる、クムトラ石窟における龜茲系石窟に対する漢系石窟は、表現こそ違っているが、実は皆同じものを指している。三者とも、いわゆる中国様式の絵画の存在を認め、この様式の絵画は、キジル石窟には見られず、クムトラ石窟に多いとする。そしてその事実が、キジル石窟に対して、クムトラ石窟を強く特徴づけていると考え、その年代を七世紀から八世紀、あるいは八世紀から九世紀とするのである。

### 三、両様式に共通する画題

一般的には、中国様式の絵画とは、先にも述べた通り、経変を中心とした大乘教的な画題を取り扱い、中国的な様式で描かれた絵画であるため、様式的にも、画題的にも、第一様式、第二様式の絵画とは異なる。しかし、現実

挿図2 クムトラ石窟第43窟 窟頂側壁 因縁図  
ベルリン国立インド美術館

伝図、4、降魔図、5、弥勒菩薩兜率天説法図の五画題である。

#### 1、因縁図

ヴォールト天井の平面に菱形の区画を設けて描かれた因縁図は、釈尊が説いた種々の因縁、果報、譬喩の内容を主題としたものであるが、普通は聴聞者に対して釈尊が説法をする場面として表わされる<sup>27)</sup>。その意味では、主室側壁に描かれた、より大きな画面の説法図と同じものとみえることもできる。キジル石窟の中心柱窟では、ヴォールト天井の平面に菱形の区画を設け、その一々の区画に別々の因縁図を描いた例が多い。図柄は、台座に坐って説法する仏とそれと向きあう聴聞者から成っているが、時には仏の両脇、あるいは前方に物語の情景が添えられる。(挿図1)恐らく、話はその区画の中だけで完結しており、左右前後の区画の絵画との説話的なつながりはない。

クムトラ石窟第四三窟の天井画からドイツ隊が切り取った断片(挿図2)も、因縁図の一部である。この窟も中心柱窟で、天井はヴォールト形であり、この湾曲した天井の両側面に、それぞれ五段の菱形の区画が設けられ

には、クムトラ石窟に描かれた中国様式の絵画のなかには、時期的には先行するクチャ地域独自の様式の絵画と同じ画題を扱ったものが少なからず見出される。この両様式に共通して採用された画題の例として、次の五つの画題を取り上げる。すなわち、1、因縁図、2、涅槃図、3、仏

その一つ一つに因縁図、すなわち仏が現世で説法する場面が描かれていた。本図が天井画の一部であることは、画面左下隅に、菱形を形作る界線として、山形の波状線が見えることから明らかである。仏は偏袒右肩に衣をまとい、二重の光背を負っており、身光の内圏は揺らめく火焰のように彩色されている。向かいの僧も衣を偏袒右肩にまとい、顔には生々しい髯が生えている。天井の菱形区画に描かれた仏の説法図という意味では、画題的には、キジル石窟の因縁図と変わりはないが、やはり第四三窟の因縁図をキジルのものとは異なると感じさせるのは、次の点においてである。まず第一点は、肉身の表現がやや生々しいことである。キジルのものがステレオタイプ的で、ほとんど生身の人間らしさを感じさせないのに比べ、第四三窟のものには生身の人間のボリュームが表現されている。第二点は、袈裟の表現がより細密

挿図3 クムトラ石窟第10窟 窟頂側壁 因縁図

になっていくことである。いかにも布を継ぎ合せて造ったという表現をとる。第三点は彩色がより複雑になっていることである。光背の文様に火焰状のゆらめきや多彩な放射光を用いるのは、キジルではあまり見られない。この第四三窟の因縁図は一般には第三様式の絵画、すなわち中国様式の絵画と言われているが、はたしてそう考えてよいのかどうかは後程検討したい。

クムトラ石窟第一〇窟も同じく中心柱窟であり、ヴォールト天井に因縁図が見られる。(挿図3) 仏の坐像と向い合う聴聞者を互い違いに積み重ねていく様子は、あたかもキジル石窟の菱形区画の因縁図を思わせるが、しかしここにはもう菱形の区画がない。また、台座の下に雲気が表現されている。ともに、キジルでは見られなかった表現である。同じく中心柱窟であるクムトラ石窟第一三窟のヴォールト天井の両側面には、二体の脇侍を従えた仏陀の坐像が、やはり互い違いに三段に積み重ねられている。(挿図4)

挿図4 クムトラ石窟第13窟 窟頂側壁 因縁図

もちろん菱形の区画は表わされず、仏陀や脇侍の台座の下には、雲気がたなびいている。この絵は、因縁図というよりは、釈迦三尊像の表現といった方がよからう。ヴォールト天井という位置はそのままだに、仏の説法というニュアンスは残しながら、段々と表現が変化していった様子が、これらの作例によって知られる。

## 2、涅槃図

クムトラ石窟第一六窟(ドイツ編号、主群第一四窟、キンナリ窟)の主室前壁の上方には中国様式の涅槃図が描かれていた。(挿図5) キジル石窟では、例えば第一六一窟のように前壁に涅槃図が描かれた例もあるが、一般的には、多くの涅槃図は中心柱窟の後廊部分に描かれている<sup>(28)</sup>。クムトラ第一六窟の方は、当然、会衆などの表現が中国風になっているが、図像構成はキジル石窟の涅槃図とほぼ同じ

挿図5 クムトラ石窟第16窟 前壁 涅槃図

挿図6 クムトラ石窟第14窟 右側壁 仏伝図(涅槃)

といえよう。とくに、仏の足元にうずくまって、その足をさする僧侶の表現は、キジル石窟にも、クムトラ石窟第一六窟にも見られる。また、クムトラ石窟第一〇窟の涅槃図の会衆は沈痛な表情を浮かべるが、これも基本的にはキジル石窟の涅槃図の会衆の表情と大きな違いはない。この涅槃図の例は、様式のみ変化し、基本的な構図が踏襲されている例である。

### 3、仏伝図

キジル石窟の壁画の画題の多くは仏伝図であると言っても過言ではない。正壁

の帝釈窟説法図、側壁の説法図、天井の因縁図、側廊や後廊部分の涅槃関連の図像などは、どれも仏伝の一場面であると言えよう。<sup>(29)</sup>しかし、ここでは、そのような広義の仏伝図ではなく、あたかも絵巻のように、連続する複数の場面によって、釈尊の生涯を表現する仏伝図を取り上げる。クムトラ石窟第一四窟の主室右壁および左壁には一連の仏伝図が描かれている。(挿図6)両壁とも、それぞれ区画を設けずに複数の場面を費やして仏伝図を描いているが、基本的には右壁の場合は入口側から正壁側へ、左壁の場合は正壁側から入口側へと、左回りに、時間の経過に即して場面を展開させている。このように、複数の場面を時間順に展開させて仏伝を表現する例としては、キジル石窟では第七六窟(ドイツ番号、孔雀窟)と第一一〇窟(ドイツ番号、階梯窟)がある。この二例が、クムトラ石窟第一四窟と異なる点は、場面毎に区画が設けられていること、場面を右回り(時計回り)に展開させていることである。個々の場面をとってみると、基本的な構図はかなり似ていることが知られる。キジル石窟第七六窟、第一一〇窟は、キジルでは古い様式をもった石窟であり、また連続した場面によって説話を表現するのは、やはり古い様式の壁画に見られる特徴である。このクムトラ石窟第一四窟の仏伝図の例は、古い表現形式が継承されている例である。

### 4、降魔図

キジル石窟第一一〇窟(階梯窟)の主室正壁の上部の半月形部分に描かれたいた降魔図は、ドイツ隊によって切り取られ、今はその向かって右側のみがベルリンに残っているが、上部に、釈尊に向かって議論をしかける魔王、下部に議論に負けて、地に突っ伏した魔王が異時同図の方法で描かれている。魔王の背後には恐ろしい形相の魔衆が控えている。また、キジル石窟第二〇五窟(ドイツ番号、第二区マーヤー窟)の左側廊の内側壁の一部には、



挿図7 キジル石窟第205窟 左側廊内側壁  
阿闍世王故事（仏伝）

阿闍世王に釈尊が涅槃に入った旨を知らせるために、行雨大臣が、釈尊の四つの大きな事跡（すなわち、誕生、降魔、初転法輪、涅槃）を絵に仕立てて見せている場面が描かれている。（挿図7）この中の降魔の図は、第一一〇窟の壁画ほど詳細ではないが、やはり議論に負けて地に伏した魔王や種々の武器を手にした魔衆が描かれている。第七六窟（孔雀窟）の仏伝図の一場面として描かれた降魔図もほぼ同様の表現である。また、キジル石窟では、例えば第七六窟に見られるように、降魔の場面として、三人の魔女による誘惑を退ける場面が描かれる場合もある。

これに対して、クムトラ石窟の降魔図は、キジル石窟壁画とほとんど同じ構図を取っているにもかかわらず、一部分に違いが見られる。魔王が表現されていないのである。第三八窟（ドイツ番号、主群第三三窟、涅槃窟）は中心

柱窟であるが、この主室正壁からヴォールト天井にかけて降魔図が描かれていた。（挿図8）塑像であった主尊の釈尊像は既に欠けているが、まわりから魔衆がいろいろな武器や、楽器を持って、襲いかかっている。しかし、魔王は描かれていない。また、先にふれたクムトラ石窟第一四窟の仏伝図の中の降魔図も、同じく釈尊と魔衆しか表わされていない。（挿図9）これは、構図の大枠を踏襲し、一部に変更を加えた例と言えよう。

5、弥勒菩薩兜率天説法図

弥勒菩薩は、釈尊の入滅後、五六億七千万年を経て、この世に現れ、釈尊の救いに洩れた人々を救済するといわれ、それまでは、兜率天に住して、衆生(30)の救済に思いを巡らしているという。クチャ地方は、弥勒菩薩に対する信仰が厚く、キジル石窟でも、例えば第二三四窟（ドイツ番号、第三区マヤー

挿図8 クムトラ石窟第38窟 正壁 降魔図  
ベルリン国立インド美術館

挿図9 クムトラ石窟第14窟 左側壁 仏伝図（降魔）

挿図10 クムトラ石窟第45窟 前壁 弥勒説法図 (旧状)  
ベルリン国立インド美術館

窟)のように、主室の前壁の上方の半月形部にこの弥勒菩薩兜率天説法図が描かれている。クムトラ石窟第四五窟(ドイツ編号、主群、記銘谷、飛天窟)にも、弥勒菩薩兜率天説法図があった。(図版III、挿図10)キジル石窟第二二四窟と同様に、本来は、大きな構図をもった絵で、中央の弥勒菩薩の坐像をはさんで、左右に三体ずつの聖衆が配されていた。構図的には、全く同一と言っても差し支えない。ただ、様式が異なるのである。特に、顔貌表現において、鼻や眼、耳にあたかも二重の描線を用いたように見えるのは、色彩によるハイライトと同じ効果を、線によってねらったものと見られる。彩色もキジルのものより幾分淡く、どちらかと言えば、線描主体の表現になっている。

以上、同じ画題をもった、クムトラの中国絵画様式とキジルの第二様式絵画とを比較してきた。中国様式でありながら、クチャ地方独自の様式の絵画にも見られる画題を採用している窟というのは、恐らく、この地に入ってきた漢人の画家が自発的であるにしろ、あるいは依頼されたにしろ、この地に伝統的な画題を踏襲して描いたのではなからうか。そのため、様式のみは中国風になったのだろうと考えられる。では逆に、クチャ系の画家が中国様式

絵画に影響されて描いた絵はなかったか。明らかに中国的であると認められる絵を除くと、クムトラ石窟第四三窟および第一〇窟が、クチャ地方独自の様式と中国様式との間の過渡的な様式を示している。では、これらの窟の壁画制作には、どちらの系統の画家が関与したのであるか。まず、クムトラ第四三窟について、キジル石窟壁画と共通する点から挙げてみよう。第一に、因縁図にクチャ地方特有の菱形の区画が用いられている。第二に、積み重ねられた菱形の区画の最下列に、本生図を伴った列が添えられている。このような例はキジル石窟には多く見られる。第三に、主室前壁の上方に仏説法図、すなわち中尊の仏を六体の菩薩が取り囲み、説法を聞く図が描かれている。これは、例えばキジル石窟第一一四窟(ドイツ編号、回転経窟)のように、キジル石窟では時々見られる図像である。第四として、正壁の仏龕の上に、菱形の区画を設け、千仏を描いている。これは、キジルのであると言いが難いが、キジル石窟第一七一窟に同様の例が見られ、全く異質というわけではない。以上の点が、この窟の壁画がキジル石窟壁画に親しいと感じさせる点である。先に見た通り、クムトラ石窟第四三窟では、因縁図の仏や聴聞者の表現にややキジルのではない表現が見られるが、違和感はそのだけである。この窟は基本的にこの地域の画家が描いたと考えて差し支えないであろう。では、第一〇窟はどうであろうか。第一〇窟に関しては、紹介されている写真の数も少なく、公刊された書籍に見られる石窟の記述も簡略なために、詳細はいまだ明らかではないが、後廊の前壁に涅槃図、後廊の後壁に荼毘、焚棺、分舍利を描いている点はキジル石窟の第二様式の壁画に近いと言えよう。しかし、因縁図に菱形の区画が設けられていない点、因縁図の仏陀が雲気に乗っている点、涅槃図の会衆が大きく目を見開き、キジルの涅槃図の会衆の表情とは異なる点が、この壁画をキジルのでないと感じさせる。恐



らく、これは漢系の画家が描いたのではなからうか。

以上に掲げた例だけでは、まだ事例が少ないが、このようにクチャ系の画家が中国様式を学んで試みた時期、反対に中国の画家がクチャの伝統的な形式を踏襲した時期があって、その後本格的に中国様式の絵画が定着したのだと考えられる。

#### 四、中国様式絵画の特徴および年代

では、中国的な様式の絵画を特徴付ける画題は何であろうか。それは、1、大乘教的な経変、2、千仏図、3、単独の尊像、4、寄進者像の四つの画題である。<sup>(31)</sup>

#### 1、大乘教的な経変

大乘教の経変は、中国様式の絵画にしか見出されない。クチャは小乗仏教

挿図11 クムトラ石窟第16窟 右側壁 観経变相図



挿図12 クムトラ石窟第16窟 左側壁 九横死

依としていることを解明した。<sup>(37)</sup> 日想観図は、まさに韋提希夫人が、四角の敷物の上に跪き、太陽に向かって合掌し、観想している図であり、着衣や山水、唐草文様の表現は、盛唐期の敦煌莫高窟壁画と相通するものがある。また、ドイツ隊が、大きな峡谷の破損の著しい小さな窟の塵芥の中から発見した伝えるのみで、発見窟の名を明らかにし得ない貴人襲撃図も、やはり観経变相図の序分義の図相の一つと考えられ、もとは大きな構図の絵画に属したものであると想像される。着衣や甲冑が明らかに中国的である。(挿図13)

#### 2、千仏図

キジル石窟に千仏図がないわけではない。キジル石窟

の教えを守ってきた地域である。大乘教の経変は、やはり中国人がもたらしたものである。クムトラ石窟において、この大乘教の経変がもつとも展開した形で残るのは、第一六窟(主群第一四窟、キンナリ窟)である。第一六窟は中心柱窟で、前壁上方に涅槃図があったことは既に述べた。この窟の両側壁の図像を解明したのは、熊谷宣夫氏である。熊谷氏は、大谷探検隊が将来した題記の断片、渡辺哲信氏や野村栄三郎氏の日記にみられる題記に関する記述、ドイツ隊のグリウンヴェーデルの調査報告書にみられるこの窟の記述、

松本栄一氏の『敦煌画の研究 図像篇』の成果などを手がかりにして、この石窟の右側壁は観経变相図であり、向かって左縁に序分義の図相(挿図11)、右縁に日想観(図IV)をはじめとする十六観図を伴っていること、左側壁は薬師浄土变相図であり、向かって左縁に十二大願、右縁に九横死の図(挿図12)を伴っていることを明らかにするとともに、薬師浄土变相が灌頂経を所

挿図13 クムトラ石窟窟未詳 観経变相図  
ベルリン国立インド美術館

の第一一〇窟(階梯窟)の天井画は因縁図に聴聞者が表わされなかった例、キジル石窟第一四窟の正壁画は、本来は塑像の仏陀像を貼り付けて、舎衛城の神変の一場面、すなわち釈尊が一瞬のうちに、多数の仏陀を出現させたという千仏化現の様子を表わした例で、必ずしも千仏図とは言えないが、このような表現が、クチャ地方において、千仏図を受入れる土壌となったのではないかと考える。明らかに千仏図と認められるのは、キジル石窟第一八九窟(ドイツ番号、前から第二窟)の天井画、および第一九〇窟の側壁画である。穹窿形の窟頂に大きい仏を配し、その周辺に千仏を巡らし、前方下縁に仏涅槃像を置く第一八九窟の例は、バーミヤーン石窟Bの洞にこれとよく似た形式の千仏図がある<sup>(38)</sup>。これに対して、中国様式のそれは、例えば第一一窟の天井画に見るように、同じ型を繰り返して、色彩的にも統一が取られており、キジル石窟の千仏図からは大きく変化した表現になっている。(挿図14)

### 3、単独の尊像

挿図14 クムトラ石窟第11窟 窟頂側壁 千仏図

キジル石窟の壁画の画題は、釈尊の伝記、もしくは本生譚が一般的で、例外的に盧舎那仏や弥勒菩薩<sup>(39)</sup>が取り上げられることはあるが、単独の尊像が礼拝像の位置を占めることは珍しい。クムトラ石窟の中国絵画様式では、単独の尊像が画題として登場する。例えば、クムトラ石窟第七五窟の地藏菩薩図がある。第七五窟は、ヴォールト天井を頂く長方形の小窟であるが、その奥壁の中央に地藏菩薩の坐像を描き、その腹前から六条の光(あるいは雲気)が広がり、その一々に六道のさまが描かれている。(挿図15)このように単独の尊像が出現するのも、中国様式になってからのことである。

### 4、寄進者像

中国様式の絵画では、寄進者の姿が変わる。クチャ地域に特有な様式の絵画では、クチャ系の王族の男女や僧侶、騎士の姿が見られたが、中国様式の絵画では、漢系の服制の寄進者、さらに時代が下ると、ウイグル系の服制の寄進者が登場する。寄進者やウイグル系の寄進者や僧侶の像には、漢字、ウ

挿図15 クムトラ石窟第75窟 正壁 地藏菩薩図

イグル文字、ときにクチャの文字で供養者名が添えられている。

次に、中国様式絵画の年代についてふれておきたい。この中国様式の絵画の年代は、従来から八、九世紀と考えられてきた。これは妥当なところであろう。漢字題記を調べても巡礼者による落書が多く、意外に造営に関わる題記は少ないようである。造営に関わる年紀を伴っているものとしては、第六八窟の南側の通廊に建中六年（七八五）の題記が認められている。この頃の前後が、河西やクチャ地方における唐の支配が安定した時期であった。先にみた大乘教の経変、とりわけ観経変相図が敦煌莫高窟の盛唐期の壁画と表現が似ている点も、中国様式の絵画が八世紀頃に定着したことをうなずかせる。

### むすび

クムトラで、本格的な中国様式絵画が描かれたのは八、九世紀であると考えてよいだろう。しかし先にみたように、キジル石窟に頻繁にみられる画題を中国的な様式で描いたものが少なからず見受けられるというのは、どのように考えたらよいのであろうか。

これまで、ドイツの研究者をはじめとして、研究者はクチャ地方独自の様式の絵画の最盛期は、六世紀から七世紀にかけてであり、この後に独自の様式は急速に衰退したと考えてきた。中国側の見解でも、宿白氏は最盛期をもう少し早め、その後には衰退期を設定するが、これは盛唐、中唐様式の絵画の時期とはへだたりがあるとする。しかし、ドイツ側や宿白氏の見解を採るならば、クムトラ石窟の造営に空白の時期を認めなくてはならなくなる。クムトラ石窟における中国絵画様式の初期の段階に、このようにキジル絵画の画題が多く残っている状況を考えるならば、むしろ晁華山氏のように、亀茲系

の（すなわちこの地域独自の）様式と漢系の様式が重なり合い、平行して行なわれたと考える方が妥当ではないか。キジル石窟の第二様式の絵画はこれまで言われてきたように七世紀頃に終わったのではなく、八世紀頃まで、すなわち漢人がこの地に入ってきた後も連続と続いていたのである。先にも述べたように、キジル地方独自の様式といわれる第二様式の絵画の詳細な様式分類とその編年は今だに解決をみえない課題である。われわれは、第一及び第二様式を再度点検し、その展開の様子を見きわめて、新しい分類と編年を提示しなければならぬ。

註

- (1) 劉松柏・周基隆「キジル石窟総叙」(『中国石窟 キジル石窟三』平凡社、一九八五年)。
- (2) 晁華山「クムトラ石窟概説」、莊強華「クムトラ石窟総叙」(『中国石窟 クムトラ石窟』平凡社、一九八五年)。
- (3) A. Grünwedel, *Altbuddhistische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan*, Berlin, 1912. (以下「Kulst.」と略す) S.14.
- (4) *Kulst.*, S.30.
- (5) A. von Le Coq und E. Waldschmidt, *Die Buddhistische Spätantike in Mittelasien*, 7Bds, Berlin, 1922-33. (以下「Bd.」と略す) VII, S.22.
- (6) 渡辺哲信「西域旅行日記」(『新西域記』上、有光社、一九三七年)。  
白須浄真「忘れられた明治の探険家 渡辺哲信」中央公論社、一九九二年。
- (7) 「堀賢雄西域旅行日記」(一)『西域文化研究』第二、法蔵館、一九五九年、(二)同第四、一九六一年、(三)同第五、一九六二年。  
堀賢雄、水野勉校閲「大谷探検隊 西域旅行日記」中国辺境歴史の旅八、白水社、一九八七年。
- (8) *Kulst.*

A.Grünwedel, *Alt-Kutscha*, Berlin, 1920.

A.von Le Coq, *Auf Hellas Spuren in Ostturkistan: Berichte und Abenteuer der II. und III. deutschen Turfan Expeditionen*, Leipzig, 1926.

A. von Le Coq, trans. by Anna Barwell, *Buried Treasures of Chinese Turkestan: An Account of the Activities and Adventures of the Second and Third*

*German Turfan Expeditions*, London, 1928.

- 木下龍也訳『中央アジア発掘記』昭森社、一九六〇年。  
木下龍也訳『中央アジア秘宝発掘記』角川書店、一九六二年。
- (9) A. von Le Coq, *Auf Hellas Spuren in Osturkistan*.  
C. Ф. Ольденбург, Русская туркестанская экспедиция 1909—10 года, Санкт-Петербург, 1914.
- (10) 秋山光和「ペリオ調査団の中央アジア旅程とその考古学的成果」(下)『仏教芸術』二〇一九五三年二月)。
- Mission Paul Pelliot, Documents Archeologiques III, *Douglour-Aqour et Soubachi*, Planches, Paris, 1967.
- Mission Paul Pelliot, Documents Archeologiques IV, *Douglour-Aqour et Soubachi*, Texte, Paris, 1982.
- Mission Paul Pelliot, Documents Archeologiques VIII, *Sites Divers de la Region de Koutcha*, Epigraphie Koutchéenne, Paris, 1987.
- (11) A. Stein, *On Ancient Central-Asian Tracks*, Phoenix Edition, 1974.
- (12) 野村栄三郎「蒙古新疆旅行日記」(『新西域記』ト)。
- (13) С. Ф. Ольденбург, Русская туркестанская экспедиция 1909—10 года.
- (14) 吉川小一郎「支那紀行」(『新西域記』下)。
- (15) A. von Le Coq, *Von Land und Leuten in Osturkistan: Berichte und Abenteuer der 4. deutschen Turfanexpedition*, Leipzig, 1928.
- ル・コック、羽鳥重雄訳『東トルキスタン風物誌』中国辺境歴史の旅四、白水社、一九八六年。
- A. von Le Coq und E. Waldschmidt, *Bd.*
- (16) 黄文弼『塔里木盆地考古記』中国田野考古報告書、考古学專刊、丁種第三号、科学出版社、一九五八年。
- 黄文弼『黄文弼蒙新考察日記(一九二七—一九三〇)』文物出版社、一九九〇年。  
黄烈編『黄文弼历史考古论集』文物出版社、一九八九年。
- (17) 宿白「キシル石窟の形式区分とその年代」(『中国石窟 キシル石窟』) 平凡社、一九八三年) 一六二—一六四頁。
- (18) 「介绍新疆文物调查工作组发现的几种文物古蹟」(『文物参攷資料』一九五四年三期)。  
王子雲「新疆拜城赫色尔石窟」(『文物参攷資料』一九五五年二期、『新疆考古三十年』新疆人民出版社、一九八三年)。
- (19) 閻文儒「龜茲境内漢人開鑿漢僧住持最多的一处石窟—庫木吐喇—考察西北石窟工作散記之二」(『現代仏学』一九六二年四期、『新疆考古三十年』)。  
閻文儒「新疆天山以南的石窟」(『文物』一九六二年七・八期、『新疆考古三十年』)。
- (20) 宿白「前掲論文」一六三頁。  
晁華山「クムトラ石窟概説」一七九頁。
- (21) *Kunst.*, SS.5-6.
- (22) *Bd. III*, SS.22-23.
- (23) *Bd. VII*, SS.24-31.
- (24) E. Waldschmidt, *Gandhara Kutscha Turfan*, Leipzig, 1925.
- Museum für Indische Kunst Berlin, Katalog 1976, Angestellte Werke, Staatliche Museen Preussischer Kulturbesitz, Berlin, 1976*, SS.105-106.
- Along the Ancient Silk Routes, Central Asian Art from The West Berlin State Museum, The Metropolitan Museum of Art, New York, 1982*, pp.46-49.
- H. Härtel und M. Yaldiz, *Die Seidenstrasse, Malereien und Plastiken aus buddhistischen Höhlentempeln, aus der Sammlung des Museums für Indischen Kunst Berlin*, Berlin, 1987, SS.32-35.
- 「ドイツ・トゥルファン探検隊 西域美術展」東京、宮崎、京都、一九九一年、一九—二〇頁。
- 晁華山「20世紀初頭のドイツ隊によるキシル石窟調査とその後の研究」(『中国石窟 キシル石窟』) 二四九—二五三頁。
- M. Yaldiz, *Archologie und Kunstgeschichte Chinesisch-Zentralasiens (Xinjiang)*, Leiden, 1987, SS.28-40.
- (25) 宿白「前掲論文」一七二—一七四頁。
- (26) 晁華山「クムトラ石窟概説」二二—二六頁。
- (27) 馬世長「キシル石窟中心柱窟の主室窟頂と後室の壁画」(『中国石窟 キシル石窟』) 平凡社、一九八四年) 一九九—二一六頁。
- (28) 宮治昭「キシル石窟の涅槃美術—ガンダーラ涅槃図の継承・変貌・展開—」(『涅槃と弥勒の図像学—インドから中央アジアへ—』第III部第三章、吉川弘文館、一九九二年)。
- (29) 丁明夷・馬世長「キシル石窟の仏伝壁画」(『中国石窟 キシル石窟』) 一七〇—二二七頁。

(30) 宮治昭「バーミヤーン石窟の天井壁画の画像構成——弥勒菩薩・千仏・飾られた  
仏陀・涅槃図——」〔涅槃と弥勒の画像学——インドから中央アジアへ——〕第Ⅲ部第  
五章。

(31) 馬世長「クムトラにおける漢民族様式の石窟」〔中国石窟——クムトラ石窟——〕二  
八—二四八頁参照。

(32) 断片のうち、一つは十六観の水想観の部分であり、他の一つは九横死の第二横死  
に相当する部分である。ともに野村栄三郎の将来である。

(33) 渡辺哲信、前掲日記、三三六頁。

(34) 野村栄三郎、前掲日記、五二二頁。

(35) *Kulst.*, SS.14-19, *Bd.* VII, SS.22-23.

(36) 松本栄一「敦煌画の研究——画像篇——」東方文化学院東京研究所、一九三七年、四五  
—九〇頁。

(37) 熊谷宣夫「クムトラ、キンナラ洞将来の壁画について」〔仏教芸術〕五、一九四  
九年一月。

(38) 宮治昭「バーミヤーン石窟の天井壁画の画像構成——弥勒菩薩・千仏・飾られ  
た仏陀・涅槃図——」。

(39) 中野照男「キジル石窟の盧舍那仏」(平成五・六年度科学研究費補助金研究成果報  
告書「東アジア美術における人のかたち」研究代表者 鶴田武良)。

#### 〔図版出典〕

挿図の写真是、以下の書物からの複写によるものである。

『中国石窟——クムトラ石窟』(平凡社、一九八五年) 図九、図一四、図二二、図三〇、  
図三五、図四五、図一七八、図一九六、図二〇〇。

『ドイツ・トゥルファン探検隊——西域美術展』目録(一九九一年) 図七二。

A. Grünwedel, *Altbdhische Kultstätten in Chinesisch-Turkistan*, Berlin, 1912.  
Fig.34, Fig.381, fig.384.

A. von Le Coq und E. Waldschmidt, *Die Buddhistische Spätantike in Mittelasien*, Bd.  
VII, Berlin, 1933, Taf.27, Taf.30.

#### 〔付記〕

本論は平成六・七年度科学研究費補助金(一般研究C)による研究「中央アジア・ク  
チャ地方における中国絵画様式の移入」の成果の一部である。

## 図版要項

一 黒田清輝筆「昔語り」の僧侶(山寺) 明治二八年(原色刷)

東京国立文化財研究所蔵

油彩 キャンバス 縦五〇・七cm 横六一・〇cm

二 岡田三郎助筆 薔薇の少女 明治三四年(原色刷)

石橋財団石橋美術館蔵

油彩 キャンバス 縦一一九・〇cm 横七八・八cm

一・二 植野健造「白馬会関連新聞記事資料」参照

三 弥勒説法図(クムトラ石窟第四五窟)

ベルリン国立インド美術館蔵

土壁彩色 縦五六・五cm 横八四・〇cm

四 日想観図(クムトラ石窟第一六窟)

同

土壁彩色 縦二九・〇cm 横三五・〇cm

三・四 中野照男「クチャ地方の中国様式絵画」参照